

探究的な学びを支援する小学校社会科地域学習用 デジタルコンテンツの開発と活用（3）

— 広域交流型オンライン社会科地域学習の構想 —

大坂 遊・草原和博・宇ノ木啓太・小栗優貴・玉井慎也・
守谷富士彦・岩佐佳哉・宅島大亮・両角遼平・青木理恵¹・
岩崎泰博²・正出七瀬³・瀬谷敦之⁴・鉦 悠介⁵・桃原研斗⁶

(2021年10月5日受理)

Development and Application of Digital Content for Elementary Social Studies using
Inquiry-Based Learning: An Online Learning Plan for Local Study to Encourage Wide Area
Communication of Elementary School Students in the Context of Municipal Mergers

Yu Osaka, Kazuhiro Kusahara, Keita Unoki, Yuki Oguri, Shinya Tamai,
Fujihiko Moriya, Yoshiya Iwasa, Hiroataka Takushima, Ryohei Morozumi, Rie Aoki¹,
Yasuhiro Iwasaki², Nanase Shode³, Atsuyuki Seiya⁴, Yusuke Tatara⁵ and Kento Momohara⁶

Abstract: In this paper, we present the results of the development of thirty digital contents in “NONTA Classroom”, for deepening regional understanding. We propose the pedagogical foundations for implementing them in the curriculum of elementary school education. We conceived of an online local study for elementary school social studies, in which the Board of Education mediates between Educational Vision Research Institute (EVRI) of Hiroshima University and elementary schools in Higashi-Hiroshima City. Future research will examine how children’s citizenship and teachers’ curriculum design are improved in the context of actual practice.

Key words: elementary social studies, digital contents, inquiry based learning, local study, online learning

キーワード：小学校社会科，デジタルコンテンツ，探究的な学び，地域学習，オンライン学習

1. 問題の所在

1.1 地域を学習／指導することの困難さ

「地域」とはどのような場所であり、子どもたちは「地域」をどのように学ばよいのだろうか。「地域」を学校で教える際、教師は何を意識しなければならない

のだろうか。

朝倉（1989）は、地域を学習することの意義を、①個々の社会事象を意味づける場、②社会生活の原則を発見させる場、③社会の発展を願う気持ちを養う場、④社会科の学習能力を育成する場、としている。いわゆる「地域（の）学習」は、このような目的のもとで、

¹ 広島県呉市立横路中学校

² 香川県善通寺市立南部小学校

³ 広島大学教育学部

⁴ 広島県尾道市立高須小学校

⁵ 広島県東広島市立高屋中学校

⁶ 鹿児島県霧島市立上小川小学校

小学校における3・4年次の社会科を中心として古くから実践されてきた。3・4年次の段階における「地域」とは、子どもたちの居住・通学する学校区から市町村単位の自治体を指しており、その範囲内の産業や消費生活の様子、地理・歴史・文化などについて、観察や調査などを通して学習する。地域学習は、地域の固有性が高いことから、教科書以上に各自治体の作成した副読本が利用されることが多く、学校や教師による独自のカリキュラムデザインが求められる領域でもある。

一方で、このような地域学習の固有性・特殊性から、地域学習の指導には特有の困難さも存在する。具体的には、小学校教師は地域学習を実施する上で、以下のような課題に直面していることが想定される。

第1に、教師自身が指導する地域について不案内であるという課題。これは、異動したばかりで地域を知らない、多忙のため教材研究で地域を歩く機会が減少している教師をとりまく実態に起因している。

第2に、広域合併にともなう「地域」の拡がりという課題。形式地域（行政地域）が拡大したことで、同一地域内にあってもよく知らない、生活圏から外れた場所が増えているという子どもの実態がある。

第3に、調査や観察に行く機会の減少という課題。校外に出かけるための時間確保と安全確保、さらに感染症の流行で集団での現地訪問がますます制限されてきている学校や社会の実態がある。

これらの地域学習の実践上の課題に対し、各自治体や学校では様々な取り組みがなされてきた。例を挙げると、河本ほか（2021）では、千葉大学教育学部附属小学校でMicrosoft社が提供するオンライン教育プラットフォームである「Teams」を活用した、オンライン上で地域学習を構想・実践する取り組みが紹介されている。近江八幡市は、発達段階に応じて育成すべき資質・能力を設定し、それらを系統的・横断的に育成していくための地域学習（ふるさと教育）を提案・実践している（上原, 2021）。熊本県教育委員会（2020）は、ICT活用に向けたテーマ別ガイドを作成し、ICTを活用して学校をこえた他の学校や専門家との交流を行う具体的な方略を提案している。このような先進的な取り組みは一部に存在するものの、地域学習の指導にともなう困難さが解消されているとは言い難い。

筆者らは、これまで地域学習用デジタルコンテンツの開発に取り組み、その成果を発信してきた（守谷・大坂・篠田ほか, 2020；守谷・大坂・草原ほか2020）。当該コンテンツは必ずしも上述の課題解決を目的に開発されたものではないが、本稿ではその可能性に鑑み、それを活用することで地域学習を充実させる手立てを

検討したい。

1.2 問題解決を支援するコンテンツ開発の取り組み

筆者らは、2018年度から2019年度にかけて、東広島市の地理・歴史・文化などをテーマ別に学習できる20のデジタルコンテンツを開発してきた。過去のコンテンツ開発および研究を通して得られた成果と課題は、以下の通りである。

まず成果として、学校教育以外の場で幅広く当該コンテンツを活用できる方法を提案し、実践してきた点である。具体的には、夏休みに東広島市立図書館と連携してコンテンツ活用講座を実施できたこと、教員免許更新講習で地域学習のあり方を検討する教材として活用できたことが挙げられる。

一方で、活用に向けた課題も発見された。まずコンテンツ自体の課題として、外国語を母語とする話者への配慮が十分ではないこと、子どもが自力で統計資料等のリソースへアクセスする方法を十分に提示できていなかったこと、そして全体として静止画の資料が多く動画のコンテンツが不足していたこと、などが挙げられる。

さらに、図書館での講習に参加した受講者や保護者の事後アンケートの回答では、社会科地域学習の場で活用を期待する声が繰り返し示されていた。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）にともなう休校やGIGAスクール構想によるICT環境の充実などで、2020年度以降この要望はさらに大きくなっている。

これらの状況をふまえ、本稿では以下2つの課題に取り組み、具体的な解決策を提示したい。

第1に、東広島市地域学習用デジタルコンテンツを今後どのように改善・充実させていくのかという問題。デジタルコンテンツの利用者の指摘をふまえ、当該コンテンツをより良くしていく方策を提案する（第2章）。

第2に、東広島市地域学習用デジタルコンテンツをいかに活用していくのかという問題。特にこれまで十分に認知・波及させることができていなかった学校教育の場でより効果的に活用されるための方策を提案する（第3章）。

2. デジタルコンテンツの構成と内容

2.1 デジタルコンテンツ（第3期）のデザイン

東広島市地域学習用デジタルコンテンツ「のん太の学び場」は、2018年6月から広島大学で社会科教育学を専攻する教員、学部生、大学院生が中心となり開発が進められた。2019年9月に第1期として10のコンテンツが公開され、その後2020年3月に第2期が、2021年3月に第

3期のコンテンツが追加され、現在合計30のコンテンツが公開されている。開発されたコンテンツは、https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/3421205100/topg/study/main/main_1.html から閲覧できる。

コンテンツの開発は、第1期より一貫して「デザイン原則（表1）」に則って行われている。また、2017年度版小学校社会科学学習指導要領の内容に配慮してキーワードを設定する、取り扱う地域の偏りを避ける、都市部と農村部の両方を扱う、関連する図書や資料類を豊富に紹介する、などの点にも引き続き留意している。コンテンツの探究構造やその特徴については、守谷・大坂・篠田ほか（2020）に詳述している。

第3期のコンテンツの概要は表2の通りである。開発に際しては、コンテンツの特性に応じたジャンル分け、多言語対応、東広島市副読本への記載の働きかけなどを行った。また、COVID-19拡大下での開発という状況もあり、スタッフが一堂に会することなく、ほぼ全面的にオンラインでの協議を進めたほか、一部の調査や取材等もオンラインで行うことを余儀なくされた。

2.2 デジタルコンテンツ（第3期）の詳細

(1) キーワード「西条」

導入部では、山頂から見下ろす西条中心市街地の景観写真を眺め、中心地としての西条の特色に注目させ、「『西条』は何の中心だろう？」という学習課題を成立させる。

展開部は5ページで構成される。「①西条ってどんなところだろう？」では、市役所や駅などの重要な施

表1 デジタルコンテンツの「デザイン原則」

①小学校3・4年生の地域学習用社会科副読本を参考にカテゴリとキーワードの選定を行う。
②文献・デジタル・リアルな社会を行き来する学びのモデルを提案する。
③探究的な学び（課題発見・課題解決学習）を支援する学習課程を構築する。
④持続可能な社会の担い手として発信できる力の育成を重視する。
⑤子どもの自由研究や市民の生涯学習など社会教育の場として活用可能にする。

（筆者作成）

表2 第3期に開発したコンテンツ（キーワード）の一覧とカテゴリ

キーワード	中心発問	主なねらい、到達目標	担当者
西条	「西条」は何の中心だろう？	資料を読み取りながら、西条の意味や来歴、中心地としての機能を歴史的な変化に基づいて説明できる。西条の歴史や今日的な状況を踏まえ、西条の地理的特色を命題化できる。	鉦
八本松	「八本松」ってどんなところだろう？	八本松に陸上自衛隊や工場等の施設がある理由を、自然的条件と社会的条件から説明できる。施設の立地に注目し、八本松の地理的・歴史的な特色を表現できる。	小栗
高屋	「高屋」には、どんなまちがあるのだろうか？	高屋にある2つの鉄道駅の特色について、利用者や土地利用の視点から比較し、地域とのつながりや変化をふまえながら新しい鉄道駅的设计図を提案できる。	守谷
福富	「福富」ってどんなところだろう？	福富町の移動式店舗を事例として、中山間地域が抱える課題と解決策を説明できる。中山間地域としての福富町の魅力を見つけ、それを表現し発信することができる。	宅島
オオサンショウウオ	「オオサンショウウオ」ってどんな生き物だろう？	オオサンショウウオの生息数が減少している理由を説明できる。オオサンショウウオが生息できる自然環境のために、私たちがすべきことを提案し、議論できる。	岩崎・青木 瀬谷・桃原
産業団地	なぜ東広島市の産業団地は人気なのだろうか？	東広島市の産業団地の分譲率が高い理由を、位置・歴史・行政の視点から説明できる。東広島市の産業を活性化させる企業誘致策を提案できる。	玉井
ふるさとの味	「ふるさとの味」はなぜおいしい？	東広島市の特産品や郷土料理、ご当地グルメが持っている特色や特色が生まれた背景を説明できる。東広島市の「ふるさとの味」の魅力を発信できる。	正出
水道料金	東広島市の水道料金はどのように決まっているのだろうか？	東広島市の水道料金の設定理由を、自然環境や人口規模、給水設備の視点から説明できる。公共財としての水の管理のあり方について、意見を述べたり質問したりできる。	玉井・小栗
災害から身を守る	どうすれば土砂災害から身を守ることができるのだろうか？	ハザードマップから、身近な地域にある危険な場所を読み取ることができる。東広島市の土砂災害の原因と、災害時に命を守るために私たちが取るべき適切な行動を説明できる。	岩佐
外国人市民	なぜ東広島市には多くの外国人市民がくらしているのだろうか？	東広島市に多くの外国人市民がくらす理由を市の産業や歴史（教育）との関係から説明できる。東広島市の多様な背景を持つ市民が共にくらすための工夫を調査・評価し、発信できる。	両角

設が西条にあると気づく。「②西条の名前の由来はなんだろう？」では、その地名が条里制に由来していることなどを確認する。「③西条の大切なれきしや文化はなんだろう？」では、人々は東広島の特徴的な歴史や文化として西条の酒蔵のある風景を最も思い浮かべること、国や県などが定める文化財として、安芸国分寺、三ツ城古墳、鏡山城跡が西条にあることを学ぶ。「④西条に重要ないせきがあるのはなぜだろう？」では、これらの遺跡がある意味を学んだのち、大事な史跡が西条に集まる理由として、西条が古くからの交通の要衝(中心地)だったことを知る。「⑤交通に注目して西条のうつり変わりを見ていこう」では、西条が江戸時代には西国街道の宿場として、明治時代には鉄道駅がある所として、交通の要衝としての役割を果たし、結果として多くの人々やもの、施設が集まったことを学ぶ。

終結部の「⑥今の西条は、なんの中心地？西条の持ちようを一言で表そう！」では、西条の歴史を年表形式にまとめた表を手がかりに、「今の西条は〇〇の中心地だ。なぜなら…」の形で、現在の西条の地理的特色についての自分の考えをまとめて発表するパフォーマンス課題に取り組む。

(2) キーワード「八本松」

導入部では、八本松駅付近の写真からまちの多様な土地利用に注目させ、「『八本松』ってどんなところだろう？」という学習課題を成立させる。

展開部は4ページで構成される。「①八本松はどこにあるんだろう？」では、地図や写真資料を読み取り、八本松が東広島市の西側に位置し、多くの工場や自衛隊の演習場を持つまちであることを認識する。「②なぜ八本松というのだろう？」では、まちの看板を読み取り、参勤交代の通り道に植えられた二本の松それぞれから、4本の枝が出て重なったことが地名の由来であることを知る。「③なぜ八本松に自衛隊の演習場があるんだろう？」では、演習場の写真や演習場付近の地図を分析し、山のふもとに広い土地がひろがっており、幅の広い道路があった八本松は演習場の立地として適当だったことを認識する。「④なぜ八本松にたくさんの産業だん地があるのだろう？」では、ある工場のヴァーチャル見学を通して、地震が少なく、広い土地や広い道路があり、空港へのアクセスも良い八本松は工場の立地に適当だったことを理解する。

終結部の「⑤八本松にあるしせつ・たて物が『なぜ八本松につくられたか』を調べ、ポスターにまとめよう！」では、フィールドワークを通して、八本松のまちの特徴と施設・建物を関連させ、立地の条件を説明するパフォーマンス課題に取り組む。

(3) キーワード「高屋」

導入部では、西高屋駅の写真を眺め、高屋のまちと鉄道駅の関係に注目させ、「『高屋』には、どんなまちがあるのだろう？」という学習課題を成立させる。

展開部は6ページで構成される。「①高屋ってどこだろう？」では、空中写真を分析しながら、交通の便が良いこと、住宅が多いこと等に気づく。「②高屋の名前の由来はなんだろう？」では、地名の由来、合併の経緯について確認する。「③西高屋駅を利用しているのはどんな人だろう？」では、「西高屋駅」の特徴を調べ、駅周辺の学校に通う生徒・学生や広島市内へ通う人の利用が多いことを学ぶ。「④白市駅を利用しているのはどんな人だろう？」では、「白市駅」の特徴を調べ、広島市内への通勤通学者だけでなく、広島空港の利用者も多いこと、白市駅は小谷に立地するが、東高屋村の中心地だった白市の商人の出資でつくられたことを学ぶ。「⑤西高屋駅と白市駅をくらべてみよう！」では、2つの駅の改札・営業時間・駅の建物・バス停の写真や動画の資料を分析し、利用客のニーズ合わせた工夫があることに気づき、駅の構造と駅周辺地域の変化は相互に影響していることを認識する。「⑥西高屋駅とまちの変化を調べてみよう！」では、大正時代から現在までの駅とまちの変化を調べ、土地利用の変化を確認する。

終結部の「⑦新しい西高屋駅周辺の活用アイデアをてい案しよう！」では、現在のまちの変化に合わせて駅や駅周辺を活性化させるアイデアを提案したチラシを作成するパフォーマンス課題に取り組む。

(4) キーワード「福富」

導入部では、福富町内の景観写真から地域の特色に注目させ、「『福富』ってどんなところだろう？」という学習課題を成立させる。

展開部は5ページで構成される。「①福富町はどこにあるのだろう？」では、看板の写真から情報を読み取り、「県央のまち」であることに気づく。「②福富ってどういう意味だろう？」では、二つの村が合併する際に新しくつけられた地名の由来について確認する。「③福富町にはどんな『福』や『富』があるのだろう？」では、町内にはシャクナゲや桜、滝などの豊かな自然環境や、道の駅をはじめとする様々な施設があることを学ぶ。「④この車のおしごとはなんだろう？」では、「とくし丸」の特徴について、クイズや写真を基に調べ、約400種類、1,400個の多様な商品を販売する移動式スーパーマーケットであることに気づく。「⑤なぜショーじは福富町で、い動式スーパーをやっているのだろう？」では、福富町周辺のスーパーマーケットの分布図を基に、移動販売が行われている理由を確認し、

「とくし丸」のドライバーや客、スーパーマーケット職員へのインタビューを通して、過疎化に対応した小売りサービスの提供を学ぶ。

終結部の「⑥あなたの町に来てほしい動式スーパーの名前とルートをてい案しよう！」では、学習者が住むまちを想定し、地域の特性や客層などの条件を考慮したうえで、そこにどのような移動式スーパーマーケットが来てほしいかについてのアイデアを提案するパフォーマンス課題に取り組む。

(5) キーワード「オオサンショウウオ」

導入部では、オオサンショウウオから届いた手紙を読み、東広島にすむオオサンショウウオに興味をもち、「『オオサンショウウオ』ってどんな生き物だろう？」という学習課題を成立させる。

展開部は4ページで構成される。「①オオサンショウウオってどんな生きものなの？」では、オオサンショウウオの写真や映像を確認し、主にオオサンショウウオの形態について学ぶ。「②オオサンショウウオはどこでどんなくらしをしているの？」では、身近な川とオオサンショウウオが生息する川を比較し、主にオオサンショウウオの生態について学ぶ。「③オオサンショウウオがピンチ？」では、オオサンショウウオが繁殖のために堰堤を登り足に穴があく様子を分析し、川の変化によりオオサンショウウオの数が減ってきていることに気づく。「④オオサンショウウオをすくうにはどうすればいい？」では、オオサンショウウオを守るための取り組みについて調べ、オオサンショウウオが引き続き生息できるように、東広島市では、生態調査や環境保全の取り組みが行われていることを認識する。

終結部の「⑤身近な川にオオサンショウウオが住むためのアイデアをてい案しよう！」では、オオサンショウウオが生息できる環境条件という視点で身近な川を分析し、環境の改善に向けた報告書を作成するパフォーマンス課題に取り組む。

(6) キーワード「産業団地」

導入部では、広島中央サイエンスパークの上空映像を眺めて、密集した工場群に注目させ、「なぜ東広島市の産業団地は人気なのだろう？」という学習課題を成立させる。

展開部は6ページで構成される。「①団地って何？団地にはどんな種類があるの？」では、辞書と身近にある団地の写真を調べ、「住宅団地」「工業団地」「流通団地」などの種類を区別する。「②産業団地って何？どこに、どんな産業団地があるの？」では、東広島市にある19の産業団地の分布を地図で調べ、幹線道路付近に立地していることに気づく。「③東広島市のもの

づくりは、さかんなのかな？」では、市町村別の製造業企業数を調べ、東広島市が県内4位の多さだと知る。「④東広島市の産業団地は、人気かな？」では、東広島市にある19の産業団地の分譲率を調べ、全て100%になっており、人気であることを認識する。「⑤東広島市の産業団地は、なぜ人気なの？(1)」では、東広島市中心の東アジア地図や公共交通機関路線図を調べ、東広島市が物流の拠点になっていることを推論する。「⑥東広島市の産業団地は、なぜ人気なの？(2)」では、東広島市産業振興課の担当者のインタビュー記事を読み取り、都市建設の歴史や市の補助・支援事業なども人気の理由となっていることに気づく。

終結部の「⑦東広島市の産業団地の未来予想図をかこう！」では、「人口」「自然」「ロボット産業と伝統産業」「日本と世界の結び付き」などを視点に30年後の東広島市の様子を絵で描くパフォーマンス課題に取り組む。

(7) キーワード「ふるさとの味」

導入部では、東広島市のホームページで紹介されている特産品の写真から同市の特産品を活かした「食」の魅力に注目させ、「『ふるさとの味』はなぜおいしい？」という学習課題を成立させる。

展開部は5ページで構成される。「①東広島市の『ふるさとの味』にはどんなものがあるのかな？」では、市内の特産品の写真やそれらが収穫される地域の地図を読み取り、「ふるさとの味」には特産品や郷土料理があることに気づく。「②東広島市にいろいろな『ふるさとの味』があるのはなぜだろう？」では、りんごと柑橘類の栽培地域の分布を事例に、同市の気候の多様性が様々な「ふるさとの味」を生み出していることを知る。「③郷土料理はどうやって『ふるさとの味』になるの？」では、同市の郷土料理である「美酒なべ」の成立を事例に、地域の歴史や文化も「ふるさとの味」を作る要因になっていることを追究する。「④コメカは郷土料理といえるかな？」では、商工会議所の方へのインタビューを通して、「ご当地グルメ」も新しい「ふるさとの味」であることに気づく。「⑤『ふるさとの味』のみ力をまとめよう」では、ページ②からページ④で取り上げた事例と各ページで学んだ内容を表に示し、「ふるさとの味」の特徴を整理する。

終結部の「⑥新しい道の駅の『ふるさとの味』をてい案しよう！」では、建設予定の道の駅で提供したい「ふるさとの味」メニューを考案するとともに、実際に調理した写真や提供したい理由、作り方の工夫等を掲載したパンフレットをつくるパフォーマンス課題に取り組む。

(8) キーワード「水道料金」

導入部では、東広島市の水道料金のお知らせを読み取り、東広島市の水道料金に注目させ、「東広島市の水道料金はどのように決まっているのだろうか？」という学習課題を成立させる。

展開部は5ページで構成される。「①わたしたちはどのくらい水道料金をはらっているのだろうか？」では、水道料金計算表を読み取り、水道料金が基本料金と超過料金で決まることを知る。「②わたしたちが使う水は、どこからやってくるのだろうか？」では、水の旅を表す資料を調べ、ダムや浄水場から供給されることを理解する。「③東広島市の自然は、水道料金とどのような関係にあるのだろうか？」では、東広島市の降水量と水の供給量を調べ、降水量が少なく、水の供給量が少なくなるほど水道料金は高くなる関係性を認識する。「④東広島市の人口は、水道料金とどのような関係にあるだろうか？」では、広島市と東広島市の人口を比べ、人口が多く、密度が高くなるほど、水道料金は低くなる関係性を認識する。「⑤東広島市の水道料金を安くするにはどうしたらいいだろうか？」では、イギリスやアメリカの水道料金の仕組みに関するインタビュー記事を読み、水道事業民営化の動きに気づく。

終結部の「⑥水道問題をうったえる立場ほ者へのしつ問を考えよう」では、子どもがニュースキャスターになりきって、市議会議員候補者が提案する水事業政策に批判的な質問を考えるパフォーマンス課題に取り組む。

(9) キーワード「災害から身を守る」

導入部では、東広島市の実際の土砂災害の写真を眺め、土砂災害への危険意識を高め、「どうすれば土砂災害から身を守ることができるのだろうか？」という学習課題を成立させる。

展開部は5ページで構成される。「①東広島市ではどのような災害が起こるのだろうか？」では、東広島市で発生した災害の年表から、身近な地域では土砂災害が多く発生していることに気づく。「②土砂災害ではどのような被害がでるのだろうか？」では、土砂災害には土石流やがけ崩れといった種類があることを確認する。また、高屋町で過去に発生した土石流の分布を確認し、土石流は谷の中から出口に向かって土砂が流れる現象であること、谷の中や谷の出口では土石流の被害を受けやすいことを理解する。「③どうして東広島市では土砂災害がくり返し起きているのだろうか？」では、東広島市の地質の分布や土石流扇状地の土地利用の変化から、土砂災害が繰り返し起きている理由を多角的に説明する。「④どうすれば土砂災害が起きやすいところを知ることができるのだろうか？」では、ハザ-

ドマップの読み方を確認し、災害が起きやすい場所を知る方法を理解する。「⑤どうすれば土砂災害から身を守ることができるのだろうか？」では、身を守る方法には「家の外へ避難する」と「家の中で避難する」の2種類があること、「マイ・タイムライン」を事前に作成することで災害時に慌てず行動できることを理解する。

終結部の「⑥ひなんルートマップをつくろう」では、ハザードマップの上に家から避難所までの経路や、「あぶない場所」をプロットするパフォーマンス課題に取り組む。

(10) キーワード「外国人市民」

導入部では、多言語で作成された東広島市の広報誌を見て、外国人市民向けの広報誌をつくる背景に注目させ、「なぜ東広島市には多くの外国人市民がくらししているのだろうか？」という学習課題を成立させる。

展開部は5ページで構成される。「①東広島市にはどのような外国人市民がどのくらい住んでいるのだろうか？」では、グラフ資料を読み取り、東広島市に暮らす外国人市民の特徴や人数の推移を確認する。「②なぜ外国人市民は東広島市に住んでいるのだろうか？」では、技能実習生や留学生などの外国人市民が多い理由として、東広島市は製造業や農業が盛んであること、また4つの大学が所在していることを理解する。「③外国人市民は東広島市でどのようにくらししているのだろうか？」では、留学生へのインタビュー記事から、外国人市民が感じる東広島市の魅力や生活の上での課題を知る。「④東広島市は外国人市民に向けてどのような取り組みをしているのだろうか？」では、東広島市が外国人市民に向けて行っている取り組みを確認する。「⑤東広島市の取り組みにはどのような課題があるのだろうか？」では、統計やアンケートから、外国人市民が東広島市で暮らす上での悩みとその理由を調べるとともに、その課題は他の市民にとっても課題となり得ることに気づく。

終結部の「⑥外国人市民がよりよくくらすための取り組みを取材して、記事にしよう！」では、外国人市民の暮らしをよりよくするための取り組みを取材して、その内容や意義を新聞や動画、パンフレットで批評し発信するパフォーマンス課題に取り組む。

3. 広域交流型地域学習の構想

3.1 カリキュラムプラン開発の目的

第1章で論じたように、筆者らが開発した地域学習用デジタルコンテンツには、コンテンツ自体の充実・改善だけでなく、コンテンツの効果的な活用と、認知

度・波及効果の拡大が課題となっている。とくに30のコンテンツが完成した2020年度以降は、後者が喫緊の課題となっている。そこで本章では、地域学習用デジタルコンテンツが学校教育で活用されるための方策として、大学と東広島市教育委員会、そして市内33の小学校が連携し、オンラインで広域的に地域学習を行うためのカリキュラムとそれを実際に運用するための体制を提案したい。

筆者らは、2020年度までに開発した「のん太の学び場」を基盤として、市内複数の小学校が協働しながらオンライン上で地域学習を展開（これを「広域交流型オンライン社会科地域学習」と称する）していくカリキュラムを構想した。直接的な目標としては、「のん太の学び場」を手がかりに、地域の多様性と共通性が理解できること、またフィールドを遠隔で観察することで、地域の地理・歴史・経済・文化・自然環境をリアルに捉えることができることとする。加えて、間接的な目標としては、市内各地の小学校がオンラインでつながって共通のトピックを学習することで、普段接することない児童が教室・校区を越えて出会い、多様な解釈・意見を交流し合い、協働の知を創出することも意図した。

3.2 カリキュラムプランのデザイン

上述の目標にもとづき、筆者らが開発した東広島市の小学校における広域交流型オンライン社会科地域学習のカリキュラムプランを表3に示す。

コンテンツは、小学生の地域学習だけでなく、一般市民の生涯学習を想定しても開発されていた。そこでカリキュラムの構想にあたっては、小学校の学習空間という文脈を想定し、以下の点に配慮して課題設定やトピック選択を行った。

第1に、学習指導要領に準拠した年間指導計画とコンテンツとのマッチングである。東広島市では、市教育委員会が刊行する副読本が市内公立小学校の全ての児童に配布され、3・4年生の社会科地域学習で活用されている。副読本は現行の小学校社会科学習指導要領に準拠した内容構成となっており（表3の副読本の目次参照）、多くの学校では社会科教科書と併用して、あるいは教科書はほとんど使わず、副読本を冒頭から順番に学習を進めている実態がある。そこでカリキュラムプランでは、ひと月に1つのトピック、1つのオンライン授業を設定し、学習指導要領や副読本の内容とそれを扱う時期に対応させてコンテンツを選択し、配列していくこととした。例えば、副読本では9月から10月にかけて「自然災害からくらしを守る」というテーマで地域の自然災害とその対処法を学習すること

が計画されている。そこで9月のトピックには、「災害から身を守る」を設定することとした。

第2に、小学校社会科の単元学習に位置付けるためのテーマや学習課題のアレンジである。デジタルコンテンツが示す内容や目標に準拠しつつも、小学校3・4学年社会科での活用を想定して、地域社会の課題と結びついた学習課題、2時間程度で知的に探究できる学習課題を設定した。例えば、トピック「消防署」では、デジタルコンテンツで取り上げられていないが、市内に新設される消防署（分署）に焦点化することで、デジタルコンテンツとは異なる切り口で消防署の機能や立地の理由を探究できる課題「高屋に新しい消防署ができるらしいよ…なぜ?」を設定した。また、オンライン授業では直接参照せずとも、教師の教材研究の素材として、また児童の調べ学習の情報源としてデジタルコンテンツを参照させることを意図した。

第3に、複線的で柔軟なカリキュラムの提示である。毎月のオンライン授業のトピックには、3年生と4年生、どちらの学年にも対応できるように、複数のトピック、複数の学習課題を例示することとした。例えば、11月は、おおよそ3年生は「くらしを守る」を、4年生は「郷土の伝統文化と先人たち」を学ぶ時期に相当する。そこで、どちらの学年でも対応できるように、「消防署」と「子どもかぶき」の2つのトピック・学習課題を構想した。また、一つひとつのトピックの独立性を高めることで、特定の月、特定の学年が飛び込みで選択的に参加しても、学びに大きな影響が出ないように配慮した。

第4に、事例地域の選択の配慮である。学習指導要領に準拠した地域の公共施設や産業、土地利用を中心にトピックを選定すると、取り上げる地域は「西条」に偏る傾向にある。東広島市の場合、市内に33の公立小学校があり、できるだけ自分たちの学区の素材・事例を通して学習させたいというニーズがある。そこで年間を通して、市内すべての地域（旧9つの町）をカバーできるようにトピックと事例地域を選択することとした。また、デジタルコンテンツの「のんバス」では、西条町のバスを集中的に扱っているが、学習用のトピックとしては市内各地のコミュニティバスを同時並行的に扱う展開に変更した。そうすることで、多くの小学校・子どもとの接点を意図的に創出し、学習上の不公平感が生じないように工夫した。

表3 広域交流型オンライン社会科地域学習の年間カリキュラム案

実施時期	「のん太の学び場」のキーワードと 考えられる学習課題例	フォーカス する町	副読本もくじとの対応 (括弧内の月は小学校社会科における一般的な学習時期)	
			1	5
			わたしたちの住んでいるところ (4～6月)	わたしたちの広島県 (4月～5月)
			(1) 学校のまわり	6 住みよい暮らしをつくる (5月～7月)
5月 (試行)	「のんバス」または「市旗」 例: ピンク色のバスのヒミツをさぐれ、仲間をさがせ! 例: 市の旗は今のままでいいか? 新しい旗を提案しよう!	全市	(2) 市の様子	(1) ごみの処理と利用
6月	「ごみ袋」または「水道料金」「公園」 例: ゴミを世の中から減らすこと・なくすことはできるか? 例: 東広島市の水道料金、なぜ高い?	黒瀬	2 はたらく人とわたしたちの暮らし (6～11月)	(2) 水はどこから ごみや水の問題を 考えよう～SDGsの視点から
7月	「牛」または「農産物直売所」 例: 私たちは東広島生まれの牛を味わうことはできる? 例: スーパーと直売所、どこが違う?どこが同じ?	福富	(1) 農家の仕事	7 自然災害から暮らしを守る (9月～10月)
			(2) 工場の仕事	8 郷土の伝統文化と先人たち (10月～12月)
9月	「災害から身を守る」 例: 身近にキケンが迫っているサインとは? 例: 私たちのまわりのキケンなどをさがせ!	河内	(3) 店ではたらく人	(1) 残したいもの 伝えたいもの
10月	「産業団地」または「瀬野八」 例: 産業団地と住宅団地はどこが同じ?どこが違う? 例: 八本松駅って、なぜあんなに広いの?	八本松	3 暮らしを守る (11月～2月)	(2) 「広島酒」の生みの親 ―三浦仙三郎―
11月	「消防署」または「子どもかぶき」 例: 高屋に新しい消防署ができるらしいよ…なぜ? 例: 10年後に「子どもかぶき」はどうなっているか?	高屋	(1) 火事からまちを守る	9 特色ある地域と人々の暮らし (1月～3月)
12月	「ふるさとの味」または「酒づくり」 例: まちにぴったりなご当地グルメを売り出そう! 例: お酒が人気なのは、お酒がおいしいからか?	安芸津	(2) 事故や事件からまちを守る	(1) 地場産業を生かし、守るまち
1月	「とんど」または「広島大学」 例: 10年後に「とんど」は生き残れるか? 例: なぜ東広島には大学が4つあるの?	西条	4 わたしたちの市のあゆみ (2月～3月)	(2) 国際交流に取り組むまち
2月	「オオサンショウウオ」または「ため池」 例: オオサンショウウオの生息地をみんなに教えるべき? 例: ため池を残したい? なくしたい?	豊栄	(1) 道具のうつりかわり	(3) 美しい自然を生かし、守るまち
3月	「外国人市民」または「志和」 例: 外国から来た人にとって東広島市はくらしやすいか? 例: インターチェンジができて、まちは変わったか?	志和	(2) 市のうつりかわり	(4) 古いまちなみを生かすまち
月に1回2時間程度、定期的で開催する			単元1～4…3年生社会科の学習内容	単元5～9…4年生社会科の学習内容

3.3 カリキュラムプランを運用するための支援体制

構想したカリキュラムプランは、各校の教師が主体的に実践することが望ましい。しかしながら、学校・教室によってICT環境には差があり、教師によってもスキルに差があり、さらに学校間の連携やフィールドワーク(現地からの中継)の準備・実施には相当な困難さが予見される。はじめから個々の教師と学校単位の運営に委ねることは現実的ではない。そこで広域交流型オンライン社会科地域学習の実行には、以下のような支援体制が求められてくるだろう。

第1に、大学との連携可能性である。大学は小学校に先んじてオンライン学習を導入しており、実践に関するノウハウを有している。そのためオンライン学習を実践する上での留意点等をマニュアル化して伝えたり、大学がハブとなってビデオ会議等を運営したりすることもできるだろう。また、大学研究者がもつ知的資源を活用すれば、地域学習に関する様々な人的リソースやフィールドを紹介できるし、実際に研究者が現地から中継や解説を行ったりすることも可能だ

う。さらに、大学の図書館や施設、論文データベース等の豊富なリソースを活用した探究学習の展開も期待できるだろう。

第2に、自治体や教育委員会との連携可能性である。本構想の実践にあたっては、時間割の変更と共通化、参加校の意思表示や授業情報の共有化など、学校を越えた決断と調整が求められる。また、ICT支援員等が不足している場合、別途技術的な支援スタッフの派遣も必要となるだろう。そこで実際の運営に当たっては、①自治体責任者が本構想の意義を理解し、実施を公式に表明し、②人的・物的資源を配置するための予算措置を講ずること、③教育委員会(指導主事等)が小学校と大学を仲介して、カリキュラムや時間割を調整し、④過大な負荷とならない範囲で研修を企画・実施し、教師の専門性開発の機会とすること、などの支援体制の構築が期待される。

幸いにして東広島市は、2021年度より国の施策と連動して「東広島市GIGAスクール構想」を推進し、情報通信ネットワークや児童生徒1人1台のタブレット

を活用した取り組みを実践する体制が整備されている。教育委員会の学校教育部内には、ICT活用支援の専門部署が設置され、ICTや社会科教育を専門とするスタッフが複数配置された。広島大学の教育ビジョン研究センターでは、平和・市民性教育ユニットを中心に社会科のカリキュラムデザインを専門とする研究者が活動している。さらに同センターのスタッフには、オンラインセミナーの運営で培われた中継・配信のノウハウが蓄積されている。このように当事者間の連携体制の構築とリソースの存在などの諸条件を整えば、デジタルコンテンツを活用した「広域交流型オンライン社会科地域学習」の実装可能性は高まるだろう。

4. 示唆と課題

本稿の執筆時点（2021年9月）では、前述した「広域交流型オンライン社会科地域学習」は稼働している。ただし、前章までに記述した当初案（2021年5月までの構想）とは一部異なる形で実装された。この差異と経緯は別稿で論じたい。

学校教育と生涯学習の教材として3か年かけて開発されたデジタルコンテンツの研究は、それを学校で活用するためのカリキュラムと活用法の開発という次なるステージに移行した。

その移行に際して、本構想が組織の方針として教育現場に「降りていく」ことは、開発者の意図するところではない。むしろ①教師や学校の自律的なカリキュラムデザインが保障され、子どもの間接経験と主体的な学びの支えとなり、社会認識を通して市民的資質を育成する教科目標が達成されることと、②「広域交流型オンライン社会科地域学習」の理念との調停が図られることが意図されたものである。草原（2021）は、オンライン学習が教室空間の閉鎖性と教師の権威性を弱め、異質な他者との対話に開かれた学校空間と市民性教育を実現していく可能性を指摘した。同論が示す社会科授業オンライン化の3類型と照合しながら、「広域交流型オンライン社会科地域学習」がどのような知識と市民的活動・能力を養っているかを調査・研究し、上述の調停が実現しているかを検証することが、次の課題となってくるだろう。

引用・参考文献

- 朝倉隆太郎（1989）「地域と地域学習の本質」朝倉隆太郎編著『地域に学ぶ社会科教育』東洋館出版社、pp.10-12.
- 伊藤裕康（2006）「市町村合併時代の小学校社会科地域学習と副読本」『地理学報告』第102号、pp.1-15.
- 上原秀一（2021）『系統的・横断的に学びを連続させるふるさと教育—発達段階に応じた資質・能力の設定と効果的なカリキュラムの調査—』<https://www.city.omihachiman.lg.jp/material/files/group/128/kenkyu2021.pdf>（2021年9月27日最終閲覧）.
- 熊本県教育委員会（2020）『ICT テーマ別実践ガイド GIGA スクール構想研修パッケージ 遠隔学習・オンライン学習編』<https://www.higo.ed.jp/colas/wysiwyg/file/download/8/1849>（2021年9月27日最終閲覧）.
- 草原和博（2021）「ポスト・コロナの教科教育の展望—教室空間を越境する教科教育の3類型—」日本教育方法学会編『教育方法50 パンデミック禍の学びと教育実践—学校の困難と変容を検討する—』学文社、pp.106-119.
- 河本大地・吉田寛・中谷佳子・河原和之（2021）「COVID-19（新型コロナウイルス感染症）禍をふまえた地域学習の在り方を考える—オンラインシンポジウムの開催経験から—」『次世代教員養成センター研究紀要』第7巻、pp.177-188.
- 守谷富士彦・大坂遊・草原和博・宅島大堯・横川知司・村田翔・小栗優貴・両角遼平・篠田裕文・正出七瀬・鉦悠介（2020a）「探究的な学びを支援する社会科地域学習用デジタルコンテンツの開発と活用(2):『のん太の学び場』の特性を活かしたオンライン教育の類型化と試行」『学芸地理』第76巻、pp.37-53.
- 守谷富士彦・大坂遊・篠田裕文・青木和樹・高見史織・正出七瀬（2020b）「探究的な学びを支援する社会科地域学習用デジタルコンテンツの開発と活用:『のん太の学び場』と『東広島市図書館連携講座』の場合」『学校教育実践学研究』第26巻、pp.59-69.